

讀

論

藏

庫

江苏工业学院图书馆
书章



鏡花全集 卷五 第五回配本（全二十九）

昭和十五年三月三十日 第一刷發行
昭和四十九年三月四日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

靈	象	(明治四十年一月)……………	一	
縁	結	び	(明治四十年一月)……………	八九
雌	蝶	(明治四十一年一月)……………	一三二	
草	迷	宮	(明治四十一年一月)……………	一六九
頬	白	鳥	(明治四十一年三月)……………	三三五
沼	夫	人	(明治四十一年六月)……………	四四三
星	女	郎	(明治四十一年十二月)……………	五四一
七		草	(明治四十二年一月)……………	六六五

靈

象

「唯今何時でございませう、」

と時間を聞きながら、幅廣な博多の角帶の間から、被せか、鍍金か、正のものか、金色の燦爛たる懷中時計を、對手に見えるやうに、鎖長く引出したのは、年紀三十三三の盲人で。

目鼻立は尋常であるが、縮れツ毛の生際から細く尖つた頤まで、揉上、耳朶をかけて、ぺろりと一皮剥いた肌へ、白粉を叩き込んだやうな不氣味に生白い、而して眉の薄い、曇つた顔色。

黒の繭紬の羽織に、紺の萬筋銘仙の袴、其の博多の帶と、是はあるべから仔細はないが、汗取の肌襦袢、木綿の白襟を幅廣く、きちんと咽喉もとで搔合はせたと、淺葱の唐縮緬の襦袢の袖のちら／＼は、聊か氣になる。

これに黒の山高帽子、脱がず、被つたまゝで、トある荒物屋の店の、これから商物を並べようと云ふ、土間の縁臺の端の處へ、ちやんと畏つて、少し前屈みになつて、今其の時計を引出した。對向ひに腰かけたのは四十年配、棒締の廣袖に浴衣を襲ねて、三尺帶、旅籠屋か何ぞの寢衣の

まゝで出たものらしい、赤ら顔で小肥りに肥つた漢。

馴れた風に、時計の表を一寸覗いて、

「五時半……些とまはりましたな。」

「はあ、五時半、」

と言ひながら胸を伸すと、引張ッこで、鎖を膝なりに向うへ突張つたが、節の高い、細長い、器用さうな指で、硝子蓋をコツとはづして、軽く細かに二つばかり、時の針に觸つて見た、成程器用なものである。

仰向いてニヤリと笑ひ、

「七分ばかりまはつたですね。」

と又ニヤリ。パチンと鳴らして、ざら／＼と鎖を捌いて、最う一息反つて、下から帶をぐいと上げて、上からすツと挟んで、下の手でトンと叩くと、其の手で件の白襟をずいと扱いて、直ぐに兩手で袖口を引張つたまゝ、膝頭へ重手に組んで、据ゑ帽子の猫背になり、腮だけ突出して、

「へゝゝゝ、」

と笑つて、

「憚り、」

とばかり鷹揚に些と高慢。

何んだ、自分で分るくらゐなら聞くには及ぶまい、見せつけがましい、小面の憎い、それにしても感のいゝ、とじろく、眼を据ゑて見上げ見下し、

「お前さん、器用なもんだね。」

と構はず、然りとては山高を見下げたものいひ。

「不自由はないが見えないばかりさ。」

とまんじりとした顔で、

「お前さん、遠方かい。」

賣つた（お前さん）を、買つた（お前さん）負けずに遣る。此處等の土地では、此の（お前さん）は失禮に當るから。

「直き其處だア。」

「近所かね、」

「目と鼻の先だよ。」

「隣家かね、」

「鼻の先だといふに、」

「分らない。」

と顔を傾ける。

「分るまい、矢張り盲目だ。それ、すぐお前さんの側に腰を掛けて居るぢやないか。」

盲人は眉を顰めた。額のあたりに嶮が見えたが、聞かぬ振をして、

「真面目に……何處から來なすつたんだ。」

「つい居まはりの旅籠屋から、起抜けに來たんだがね、實は旅商人さ。」

「はあ、商人か、」

と輕んずる色を泛べた。

「何うです、儲かりますかな。」

二

「申戲を言つちや不可え。」

と對手は何故か突懸り氣味になつて、

「人ごみを見掛けて餡パンを賣つたり、蜜柑、煙草を商ふんぢやないぜ。お菓子はよしかにして

やあがら。恁う見えても、否さ、お前さんには見えやしまいが、しらきちやうめんの見物だぜ。

「おい、」

「見物？何を見物するんです。」

「何をツて、あれよ。向うの監獄の門が開くと、亭主殺しの別嬪が、御年貢が済んで、久しぶりで今朝娑婆の風に當るのが、追付け出て来る。それを観るのよ。」

「變な見世物だね、牢を出る罪人を見物も可笑なものだ。」

と乾燥いだ下唇を眞赤な舌で一寸濕して、ごつくり唾をのみながら鼻の尖でせゝら笑ふ。

商人は目をぎろり。

「異う言ひなさるもんだ。えゝ、おい、お前さんだつて見物だらう。おまけに煙草盆なんぞ借込んでよ。随分人群集はして居るが、そんな念入なのは一人も居ねえぜ。馬鹿にしねえ。」

忌々しさうに、手を廣袖へ突込んで、二の腕のあたりをごしゝと搔きながら、横向きになつて取合はない風をする。

盲人は指を反らして、膝頭を一つ弾き、

「邪慳だね、君は、はゝゝはゝゝ、」

と吐出すやうな笑ひ方をして、

「私の言ふ事が何んだか一々氣になるやうだね。」

「當前よ、」

と流眊に懸けたが、又此の商人といふ漢の目の、きよろ／＼と働くのは、對手が盲目だけに尙著しい。

「小癩に障るかね。」

「ちよッ煩え。」

と舌打をする。

「まるで喧嘩だね。仇同士のやうだ、は、は、」

件の其の笑方をして、ぐツと仰向き、身體ごと手を腰へ廻して、羽織の裏を引覆すやうにして、煙草入を抜きながら、ト笏を構へた體に、兩手で筒を膝に突立て、最う一息斜ッかひに仰向いて、
「時に、君、仇同士と極まつた處で、一つお願いがあるが聽いてくれませんか。君も私が小癩に障る。」

私もまた、先刻からの様子で、君を優しい人とも、しんせつな人とも思はない。宜しいか、と念を入れ、唇をべろりと嘗め、

「意地の悪い、邪慳な、鋭い、油斷ならない人間だと思ふんだ。宜しいか。處で、其處を見込んで、お願いだ。」

「妙な願ひだな。」

と釣寄せられた形で、くるりと向き直つて、

「何んだ、言つて見ねえ。」

スポンと筒を抜く、煙管を出すかと思ふと然うでない、するりと又箝めて、上から壓へて、

「他ぢやないがね。」

と其の煙管筒を筋違ひに——並行に胸を曲げて、耳を煙草盆に差寄せたは、是から低聲になり

ます、恠うして、お聞きなさいの仕方。

「お互に、處で、それ其の監獄から出て來る人を、疾い話が見物をするんだがね。私は此の通り

目が見えないから、口惜くツても、什麼風だか、容子だか、些とも分らないと言つたもんです。

其のさ、娑婆へ出た處の、態、恰好、其邊の工合、見物の様子なんか、一つ委しく話をして下

さらんか。

ねえ、君、

たゞは使ひません。相當の、いや、過分の禮をするよ。

と恠う言つたら、君、又小癢に障るだらうね。處で、何うせ最初から小癢に障つてお在でなさ

るもんだから、癢ついでに、是非頼まれてくれたまへ。」

と故とか、書生のやうな口の利き方をして、
「此處なんです、意地の悪い、不深切な人と見込んで頼むと言ふのは……」

三

「どうせ何んだよ。君、盲人が、こんな場所へ出しやばつて、其處等の人を捉まへて、いま放免された婦人はどんな様子ですか、如何な風です、衣服は、帯は、と聞いて見たまへ。按摩の癖に、と先方が別嬪だけ尙の事さ。」

聞かれたものは、假令柔和でも、お心好でも、穩當な、しんせつな人でも、私だけには誰でも邪慳に、突慳貪に成らうと言ふもんだ。

其處で、始めからしんせつな仇同士のやうな、仲の悪い、君を見立てて頼むんだからね、はゝゝ、」

と衣紋を迫上げて、

「小癩に障る、憎い奴の頼む事だ。禮金の處は、随分阿漕に吃驚するほどお取んなさるが可いのだ。何うだね、君も商人だ、此處等が算盤の持處だらう。」

泰然とした様子を見せよう爲か、肩を落して、首を長うして空嘯いたが、思切つたやうで、悟

つたやうで、太々しい中にもあきらめた狀が見えて——盲人だけに——憎々しくも哀れであつた。

「うむ、」

と太い聲で、商人は一つ氣を入れて、

「可からう！ 錢金づくなら何んだつて頼まれら。お前さんも可いものに頼んだぜ、婦人にかけては恐らく女衞もやる男だ、委しく話して聞かせて上げよう。」

何また商賣冥利だ。禮だつて満更、盲目の目を抜くやうな酷い事はしやしないよ。

だが、お前、」

と煙草盆を押して馴々しく膝を寄せて、

「恐ろしく氣張んなさるぢやないか、何う云ふ因縁だね。」

「因縁とは……」

「否さ、お前さん、其の婦人とは知己かね。」

「知己とも、」

と言つた時、塞いだ下に眼球をくるりと動かして、唇に得も言はれず一種の冷笑を泛べたのである。

「其癖、何だね、別に迎に來なすつた様子でもないやうだ。」

「そりや、」

と押被せるやうに調子を高めたが、グツと又聲を低うして、

「當前さ。夫を殺したといふ婦人ぢやないか。外聞に係ります。身内も少くはないんだけれど、確かに、誰一人として迎ひになんぞ来るものはない筈になつて居るのさ。」

商人も四邊を向し、

「ぢやあ、此の人だから、こりや皆見物なのか。おや、」

と今更呆れたらしい口吻で、

「兩側は雑と人垣を拵へたぜ。すると隣の店を借りて居る、女まじりの、(連中)と云つたやうな

一組なんぞも、矢張御見物で在らつしやるかい。

私は又大した財産家の御新姐だと聞いたから、こりや素ばらしい出迎だ。此の人数で引包めば、白晝も暗夜にして、當人の淺ましい姿も、人目に觸れねえで済むだらう。大樹の蔭だ、何の道もと思つてたんだが、皆見物ぢや、さて、娑婆へ出た處が思ひ遣られる。」

「大分集つたかね。」

と盲人は耳を外の方へ傾けて、物音、人聲を掬ひ込むやうに顔をしゃくつた。

「わや、がや、がや、む、出た。」

「出たにも何んにも。」

廂の下から、小溝の上へ、半身を乗出して、

「突當りの、あの遠くの坂なんざ、蟻の這ふやうだ。どうだい、處々砂煙が立つて居る。尤もな、」

と自分で合點して一つ頷き、

「坂の上の廣場にや、象の見世物があつて、其處も大概な人出だからな。」

「いくら地方だつて、今時象の見世物ぐらゐるに、そんなに人が出るもんかね、皆な監獄の門が當なんだね。」

「些と仰山過ぎやしないか、此處だけでは。」

お前さん、象の方も大評判だぜ。象より黒人を見に行くんだ。印度人とか亞刺比亞人とか云ふ黒人を。」

「それにしてもこんなに朝蚤く……七時……七時に地獄の釜の蓋が開くんだもの。」
と見えぬ目を瞬いて、強ひて我言の眞なるよしを、觀たさうに悶くは何故か。

四

「だがね、慍う言つちや如何だけれど、物見高いことに掛けては、日本國中何處へ出しても餘り敗は取らない御國柄だ。私あ度々御世話に成りに來て知つてゐるけれど、」

と言ひかけてフト口を噤む。八百屋が來て、小溝の前に荷を下ろした。ト荷繩を捌いて笹の兩方へ天秤を渡したから、今日は、と此の荒物屋へ入るだらうと思ふと、然うでない。悠々笠の紐を解いて、脱いだのを片手に提げて、徐ろに其の天秤棒に腰を掛けた。仕込みも少いか輕さうで、白露かゝる青物には、しなはなかつた商賣道具が、椅子に成つたのでギウと鳴る。

笠を取つた段は、扱案するに、(前の人帽子を)と言はれぬ前の、大入場の賢い用意と見える。是に機を得て、五六人ばらくと、吹寄せられた木の葉のやうに溜つて來た。就中八百屋と並んで立つたのは、古洋服の腰辨當、口髻を生やした中爺さん。

トばたく慌しく奥から驅けて來たものがある。仲仕切の障子の破れから店前を覗いたのは、荒物屋の女房で、表へ寄せて來た登音に、驚破で誘はれたものらしい。

「まだく、どうして、」

と言つて濡手を拭いたナ、前垂のすれる音。

「時間にやならない。七時かつきり懸直なしぢや、」

と男の聲、四五人が其處にも居る。